

語搔漆憑狐国伊紀

一郎潤崎谷

青空文庫

漆搔きと云つたつて都会の人は御存知ないかも知れませんが、山の中へ這入つて行つて漆の樹からうるしの汁をしぼるんです。いえ、なかなか、百姓の片手間ではありません。ちゃんとそれを専門にする者があつたんで、近頃はめつたに見かけませんけれど、外国の安い漆が輸入されるようになったそうですから、いまだきあんなことをしても手間ばかりかかつて引き合わないんでしような。兎に角以前には私の村わたしなんかへもよく漆かきが奈良あたりからやつて来たもんです。漆うるしかんな 鉋と云つて、鎌のようなもので先の曲つた奴を持って、腰に三四合ぐらい這入る竹の筒を提げて、漆を見つけると、その鉋で皮へ傷をつける。それがあんまり

深く傷をつけ過ぎてもいけないし、浅過ぎてもいけないし、呼吸物なんで、その傷口から松^{まつ}脂^{やに}のようにどろりと滲^しみ出て来る汁を篋^{へら}ですくって竹の筒へ入れる。そんな時にうっかり下手なことをやって汗が顔へはねかかったりすると、それこそ赤く脹れ上りますから、馴れた者でないと出来ない仕事なんでして、漆にカブレないように紺の手甲を着けて、すっかり紺装束で出掛ける。まあそんなことをする人間なんで、私の村にもその商売の者が一人住んでいましたね。此の男は遠くへ出稼ぎをするのでなく、村の近所の山へ這入ってはうるしを採ってくらしていました。或る夏の日、その漆かきが一と仕事してから山の中でひるねをしていますと、夕立ちが来たもんですからふっと眼をさしました。

そしてそのときに、ハテナ、己はひよつとすると寝ていた間に狐に憑つかれやしなかつたかなと、そう思ったと云うんです。それが別にどうと云う理由があるのではないんですけれど、淋しい所をひとり歩いているときなんぞに憑つかれることがよくあるんで、ただ何んとなくそういう感じがしたんでしような。で、まあ、家へ帰つてもそれが気になつて仕方がない、どうも狐がついたようだから明神さまへお参りをして来てくれるとお袋ふくろに頼んだりして、友だちなんかにそんなことを云つていましたが、そのうちにととう床について、飯も食わないようになったんです。それで先生布団をかぶつて半病人のようになつたらうつらうつらしながら、日が暮れると云うと、ああ、今夜あたりは狐が迎いに来やしないかな、

今にきつと来やしないかなと、心待ちに待たれるような、妙にそれが楽しみのような気持ちでいると、案の定夜になつてから友達のような男が三人ばかり表へやつて来て、「さあ、行いこら」「さあ、行いこら」と誘うんだそうです。尤も友達と云つたつて見おぼえのある男ではないんで、みんなせいが三尺か四尺ぐらいの小男で、法被はっぴを着て、木や竹の杖をついていて、何か非常に面白そうに「行いこら行いこら」と云うんですが、それを聞くと行きたくつて行きたくつてたまらなくなるんだそうです。けれどもアレは狐だから行くんではないぞ、あんな者に誘われてはならないぞと思つてじつと我慢していると、友だち共は仕方がなしに歸つてしまう。するとその後ろ姿に尻尾しっぽのようなものがチラチラ見えるようなん

で、ああやつぱり行かないでいい事をしたと、そのときはそう思
いながら、又あくる日のゆうがたになると、今夜も誘いに来やし
ないかなと心待ちに待つようになる。そうするうちに果たしてや
つて来て「行こら行こら」と誘うんですが、それがもう、さも面
白そうなんで、つかうかと行きたくなくなるんだそうですね。し
かしその晩も一生懸命に我慢してしまつたところが、三日目の晩
の九時頃に、家の前に庭があつて、庭の下が六尺ばかりの崖がけにな
つていて、崖から向うは一面に麻の畑でした。それが夏のことで
すから麻が高く伸びていて、ちょうどその庭と畑とが同じ平面に
見える。で、その畑の方へ例の小男が三人連れ立つてやつて来て、
「さあ行こら」「さあ行こら」と云うんだそうですね。よくよく見

るとその男たちの着ている法被に何か圓い紋がついていたそうですけれども、どんな紋だったか、そこところはハッキリ覚えていないんだそうで、いつもの通りめいめいが杖をつけていて、しきりにそう云って誘うもんですから、とうとうその晩は我慢しきれなくなつてしまつた。それでそうつと家を抜け出ようとしたときに生憎親父が小便に起きたんで、こいつはいけないと思つて、

「行きたいんだけど、親父に見付かると面倒だから己は止すよ」と云うと、「なあに己たちが一緒なら大丈夫だ、こうすれば親父に見つかりはしないから、まあ附いて来い」と云つて、その三人の友達が手をつなぎ合つて、輪をこしらえて、その輪の中へ丑次郎——という名だつたんですが、その漆搔きの男を入れた。そ

して、「さあこうすれば親父が見ても見えやしないから心配するな、附いて来い」と云つて連れて行くんで、ちようど便所から出て来た親父とすれちがひになつたそうですけれども、成る程親父には此方の姿が見えないようなあんばいだった。それからその晩は麻の畑の中で遊んで、いろいろ御馳走をしてくれたりしただけで、明け方には無事に家へ帰してくれたそうですが、四日目の夕方は日が暮れないうちから楽しみで楽しみで、早く誘いに来てくれないかなと思つてしていると、やはり昨夜と同じ刻限にやつて来て「行こら、行こら」と云うんです。で、又附いて行きますと、今夜はいい所へ行こうと云つて、家のじき近所にガータ口のいる淵があるんですが、その淵の方へ出かけたと云います。え、ガー

タロですか。ガータロと云うのはあれは河童かっぱのことなんです。ぜんたい私共の村は高野山の南三里ばかりの山奥にあつて、私の字あざは一方が山で一方が谷になつたゆるやかな傾斜面のところどろに家がチラホラ建つてゐる。丑次郎の家というのも山と山の間にある淋しい一軒家なんです。前に三四枚の段々畑があつて、その先が今云つたガータロのいる淵なんです。別に名前のあるような淵ではないんで、村の者はトチ淵ぶちトチ淵と云つていましたが、さあ、どう云う字を書きますかな。何しろ大滝だとか赤滝だとか云つて、非常に滝の多いところですね、その滝壺の下流が今云つた谷の底を流れていて、淵になつてゐるのはほんのわずかなところなんです、そこにはいつも水が真つ青よどに濼よどんでいて、まん

中に平べったい一枚岩が出ていました。ガータロはその一枚岩の上にとどき姿を現わすことがありましたから、たしかにその淵に棲んでいたには違いないんで、見た人は大勢あるんです。ええ、ええ、私も一遍見たことがありますよ。なんでも夏の日ざかりに山の上を通っていると、下の方にその淵が見えて、岩の上に変な奴がすわっているんで、「ああ、ガータロが出ているな」と思っただことがありました。さあ、そうですね、遠くから見ただからよくは分かりませんでしたけれど、人間よりは小さかったようで、まあ猿ぐらいでしょうかな。姿も猿に似かよっていて、ただ斯う、頭の上に妙な白いものが喰つ着いているんで、鳥打帽子を被っているように見えましてよ。ええ、ええ、よく人間に害をする奴な

んで、私の知っている人でも、ガータロに見込まれて水の中へ引きずり込まれそうになったり、ほんとうに引きずり込まれて死んでしまったのもあるんです。これは餘談になりますが、その谷川の別なところに丸木橋がかかっていますね。或る私の友人が夕方その橋をわたろうとすると、うっかり足を踏み外して、水の中へ片足をついたのが、岸の方の浅瀬だったんですけれど、その片足を抜こうとしても水が粘り着くようになって、どうしても抜けない。しきりに抜こうともがいているうちに、次第にずるずると深みへ引つ張られそうになるんで、ハテな、ガータロに見込まれると水が粘ると云う話だが、こりやあガータロの仕業しわざだなど気が付いたんです。ところでガータロと云う奴は鉄氣かなけを嫌うもんです

から、そう云う時には、何んでも構わない、鉄氣のものを水の中へ投げさえすれば助かるんで、ふつとそのことを思い出して、幸い腰にさしていた鎌を川の中へ投げた。そうしたら難なくすつと足が抜けたんで、真つ青になつて歸つて来て、実はたった今此れ此れだったと私共に話したことがありました。もうよつほどの歳ですけれども、未だに達者な人でして、至つて正直な、うそを云うような人間ではありませんから、事実そんな目に遇つたに違いないんですな。しかし此の男はそう云う訳で命を取りとめましたけれども、もう一人今のトチ淵へ餓^はまつて死んだ者がありました。十四五になる可愛い女の児でしたがね。なんでも同じ村の餘所^{よそ}の家へ子守りに雇われていて、めつたとひとり遊びに出るよう

なことはなかつたのに、その日に限つて、赤ん坊の寝ている間に
出て行つて、二三人の友達と一緒にその淵の所で鮎を釣つていた
と云うんです。それが、おかしいのは、淵によどんでいる水が、
ほんの一間ばかりの間岩の下をくぐつて、すぐその先の方へ行く
と滝のようになって流れ落ちているんですが、その女の児は淵と
早瀬との境目にある岩の上にしやがんで、瀬の方で釣ればいいも
のを、淵の方を向いて釣つていた。すると、友達の女の児もみん
な同じ所で釣つていたのに、どう云うものか外の者には一向釣れ
ないで、その女の児の鉤はりにばかり魚がかかる。外の女の児たちは
詰まらないもんですから、此処は止そうよ、何処か別の所へ行こ
うよと云うんですけれども、その女の児だけは面白いように釣れ

るんで、夢中になっていつ迄も釣っている。そのうちにだんだん日が暮れて来ましたが、もうおそいから帰ろうと云つても聴き入れないんで、外の者はその兎を置き去りにして帰ってしまった。さあそうすると、晩になつても姿が見えないもんですから、主人の家では心配をして、親元の方を尋ねさせると、其方へも来ていないと云うんで、大騒ぎになつて、いろいろ心あたりを調べると、実は晝間これこれだつたと云う。外の兎たちは云えば叱られると思つたんで、聞かれる迄黙つていたんですな。で、早速みんながその淵のところへ行つて見ると、ちゃんと下駄が脱いであるんで、いよいよガータロに見込まれたんだと云うことになつて、それから泳ぎの達者な者が体へ綱をつけましてね、ガータロが出たら合

凶をするから、そうしたら綱を引つ張つて貰うように頼んで置いて、淵の底へもぐつて行つて、屍骸を引き上げたことがありますよ。兎に角その女の児が鉤を垂れると、ほら釣れた、ほら釣れたと云うようにいくらでも釣れるんで、外の鉤にはちつとも寄つて来なかつたと云うんですから、そこが不思議なんですよ。あ、そう、そう、そう云えば、その前日に、その女の児の親たちの家の屋根の上からその淵の方へ虹がかかっているのを、たしかに見た者があると云います。虹がそんなに近いところにある筈のものではないのに、ちょうどその家の上から出ているんで、何かあの家に変つたことでもあるんじゃないかと思つていたら、その明くる日にそう云うことがあつたんだそうです。でまあ、そのガ―

タロのいる淵の方へその漆かきは連れて行かれた訳なんです、なぜだか知れないが死のうと云うことを考えて、今夜は一つあの淵へ身を投げてやろうと思いなから附いて行くと、大勢の人が提灯をつけて淵の方へぞろぞろやって来るんだそうです。それで暫く物蔭に隠れて窺がっていると、村長さんだの、伯父さんだの、伯母さんだの、親類の誰彼なんぞの顔が見えるんで、中にはもう死んでしまった人なんぞが交っているもんですから、おかしいなあ、あの伯父さんは死んだ筈なのにまだ生きていたのかなあと、そんなことを考えながら待っていましたけれど、提灯の数が追い追いたくさんになって来て淵のまわりをウロウロしている。この様子じゃあとても駄目だと思ったんで、「どうも死ぬのに都合が

悪いから、今夜はもう帰る」というと、「そんならもつと面白い所へ連れて行つてやるから、まあ一緒に来い」と云つて、棕櫚山の方へ引つ張つて行つた。その辺はいつたいに棕櫚が多いんでして、大概の山には、高いのになると三間ぐらい、普通二間ぐらいの棕櫚と、一丈ぐらいの薄のような草が生い茂っているんですが、その茂みの中を分けて行つたら、山の中途に大きな岩が突き出ていて、友達の連中はその岩の上へするすると身軽に登つた。だが見たところ丑次郎には登れそうもないので、「己はそんな高い所へ上れ^{あが}ないから止める」というと、「なあに己たちが手伝つてやるから大丈夫だよ、上つて見ろく」と云つて、三人の小男が上から引つ張つたり下から腰を押し上げたりした。お蔭でどうやら

上れることは上れたけれども、上る拍子に脛を擦り剥いたんで、今度はそれが痛くつてたまらない。「痛い痛い」と云うと、「よし、よし、つばきを付ければすぐに直る」と云つて、つばきを付けてくれたらじきに痛みが止まった。すると又咽喉が渴かわいて来たんで、「水が飲みたい」と云うと、「じゃ、まあ、ここで休もう」と云つて、道ばたに休んで、何処から持つて来たのだから直ぐに水を飲ましてくれたが、なんだかその水が小便臭かったそうです。で、その山を越えると、私の家の方へ下りて来ることになるんで、ああ、そうだったな、此処はもう鈴木さんの家の近所だなと、はつとそのときに気が付いたらしくつて、「もう己は帰る」と云い出したところが、「まあいいからもう少し遊ぼう」と云つて、し

きりに引つ張つて行くんだそうです。それでも無理に帰ると云つて、とうとう振り切つて来たそうですが、その晩も、その前の晩も、家に戻つたのは夜中の三時ごろだったそうで、いつも夜の明けるとは必ず帰してくれたと云います。さて五日目の晩に待っている、又「行こら行こら」と云いながらやつて来て、今夜は伊勢へ連れて行つてやると云う話で、伊勢の松坂へ出かけて、何んとか云う料理屋の二階へ上ると、たいそう結構な朱塗りの高たかあ脚しのお膳が出て、立派なお座敷で御馳走をたべた。それから街道を歩いて行つたら、此処はカノマツバラだと云うんで、見ると成る程松原がある。けれども、その時に斯う、ぼんやりと分つたのは、私の村から有田ありたくん郡の方へ抜ける山路にヤカンダニと云う

谷があつて、めつたに人の通らない淋しい所なんです。そこをその漆掻きは前に一遍あるいたことがある。で、そう云う時にもいくらかその記憶が残っていたものと見えて、カノマツバラだと云うけれども、どうも此処はヤカランダニのようだから、「ヤカランダニじゃあないか」と云うと、「なんだ、お前はヤカランダニを知っていたのか。ではもつと外の所へ行こう」と云つて、又方々を歩き廻つて、「さあ、どうだ、此処がカノマツバラだ」と云われて見ると、今度は覚えのない土地で、松がずうつと生えていて、たしかに松原の景色になっている。しかしそう云う間にもときどき正気に復^{かえ}るらしく、己は狐に欺されているんだと云う考えがふいと起ることがあつて、三人の小男の様子なども、人間の姿をし

ているように思えながら、どうかした拍子に尻尾が見える。はつきり見えるのではなしに、チラチラと斯う、見えたり見えなかつたりするような工合なんですな。要するにまあその時分からそろそろ意識が回復して来たんで、ヤカランダニを通つてからも暫く何処か無茶苦茶に引つ張り廻されていたようですが、そのうちに、村にイカキ山と云つて、いかき 笹のような恰好をした山があるんで、そこを通つた時は、此処はイカキ山だなど云うことが分つたと云います。しかしその山は松だのけやき 櫛だのいろいろなぞうき 雑木が生えている密林なんでして、その林のなかをぐる／＼歩いてるうちに、木に引つかかつて、フンドシが解けた。で、「まあ、待つてくれ、フンドシが解けたから」と云うと、「そんなものは構わないから

放つて置け、ぐずぐずしていると夜が明けるから急がなくっちゃいけない」と云つて引つ張つて行くんで、「もう己は帰る」と云うと、「帰らないでもいいよ。それより何所か寝る所があったら、みんなで一緒に寝ようじゃないか」と云うんだそうです。するともう夜がしらみかかつて来たもんですから、その漆かきも今更家うちへ帰りにくくなつてしまつて、私の家の近所いえにある阿弥陀堂の方へ行つた。と云うのは、その阿弥陀堂なら四人で寝るのにちょうど都合がいい場所なので、そこへみんなを連れて行つて寝ようという考えが、ちゃんとそのときに頭にあつたらしいんですな。それで阿弥陀堂へ行くのには、私の家と隣りの家との間を通らなければならぬんですが、隣りの家の庭に古い大きな柿の木があつ

て、それが往来の方へ枝を出していた、その木の下を通つた時分に、「ああ、此処は鈴木の家側だから、もうすぐ其処が阿弥陀堂だ」と思ったそうです。その阿弥陀堂は草葺きのお堂なんです、うしろの方に四尺に一間ぐらいな裏堂が附いていて、その中に村のお祭りや盆踊りなんぞに使う提灯だの行燈だの蕙だのが置いてあつたんですが、その蕙のことを覚えていて、あの裏堂で寝ようというつもりだった。ところがそこへ這入るのには屋根からでないとい入れない。今も云う通りいろいろな物が入れてあつたもんですから、子供なんぞがいたずらをしないように、扉を中から締めてしまつて、屋根裏から出入りするようになつてあつたので、そのこともちゃんと覚えていて、屋根裏へ上つた。尤もその時に

矢張り小男の連中が上から引つ張ったり下から押し上げたりしてくれたそうで、上つて見ると、そこに二尺ぐらいの幅の厚い櫓の板が渡してある。これはお堂の中の品物を出し入れする時の足場に作つてあつたんで、その板に腰かけて蕙の上へ飛び降りる料簡だつたんですが、小男共は、「此処がいい、く」と云つて、草葺きですから、庇の裏ひさしの方から上ると、竹を編んだ屋根の土台が見える、その竹の棒に掴まつて屋根の草の中へ体を突つ込んで、「此方へ来い、く」と云うんだそうです。成る程その連中はみんなせいが低いんだから巧く草の中へもぐり込めますけれども、丑次郎には這入れる訳がないんで、「己は体が大きいから駄目だ、そんな所へ這入つたら足が出てしまう」と云うと、「まあ試しに

這入つて見ろ」と云うんで、這入つて寝てみたら案の定足が出てしまった。「ほれ御覽、こんなに足が出たじゃないか」と云つたら、「では仕方がないから中へ這入ろう」と云うことになつて、さっきの屋根裏からでなく、別な所へ穴をあけて、その穴から、一人ずつ庭の上へ飛び降りて、裏堂の中の狭い場所へ四人が並んで寝た。それから少しとろとろとしたと思うと、お堂のうしろの板が三寸四方ぐらい切り取つてある、それは以前に、泥坊が内部にしまつてあるものを覗のぞこうとしてそんな穴を拵えたことがあるんで、もうすっかり夜が明けたらしく、そこから朝日がさし込んでいる。と、やがて表が騒々しくなつたんで、その穴へ眼をつけて見ると、村の子供たちがお堂の前で遊んでいるので、ガヤガヤ

く云つていてとても眠れない。「どうもあの子供たちがうるさいな」と云うと、「よし、よし、己が彼奴等あいつらを追つ拂つて来てやる」と云つて、一人の小男が外へ出て行つた様子でしたが、どんなことをしたのか知れませんが、兎に角その男が行つたら子供たちはいなくなつてしまつた。それでようよう落着いて寝ようとすると、生憎とまた小便が出たくなつたので、「一寸小便をして来る」と云つたら、「いや、出てはいけない、出てはいけない」と云つて、一生懸命に止める。「出ると掴つかまるから出てはいけない。小便がしたければ此の中でしろ。さあ、己達も此処ですぞ」と云つて、三人とも寝ながら小便を試みさせてみせるんですが、丑次郎にはどうしてもそこでする気になれない。もう出たくつて

たまらなくなつて来たんで、とうとう又その屋根の穴からお堂の外へ降りたところが、遠くに私が立っついていて自分の方を見ているので、「あ、鈴木さんに見られたな」と、その時はつきりとそう感じた。そして私が近寄つて行く間に、三人の小男どもは慌あわてて逃げ出してしまったのだそうです。

さあ、そうでしたね、掴まえたのは朝の九時頃でしたかね。何しろ丑次郎がいないと云うので、村では搜索隊を作つて山狩りを始めていたんです。それが明神様のお告げでは丑うし寅とらの方の山手にいると云う訳なので、一間置きぐらいに人が立つて、八方から山を囲んで登つて行こうとしていました。私もその搜索隊に加わつていたのですが、みんな鎌なただの鉈なただのを持つているのに、私は素す

手だつたもんですからすこし気味が悪くなつて、もう山へ登りかかつていたんですけれども、ちよつと家へ行つて来ると云つて、それを取りに戻つて来た時に丑次郎がお堂の縁に立っているのを見たんです。なんでも斯う、繩の帯をしめて、両手をうしろへ廻して、前の晩に雨が降つたんで裾の方がびっしより濡れた着物を着て立っていましたかね。「丑じゃないか」と云つて、此方も恐こわわ恐声をかけながら近寄つて行くと、急いでお堂の中へ逃げ込もうとするので、掴まえようとしたところが、えらい力で抵抗してなかなか云うことを聴きませんでしたよ。そのうちに大勢駈け付けて来て、やつとのことで押さえつけて家へ引つ張つて行つたんですが、家のしきい闕を跨ぐまでは可なり元気に歩きましたね。それか

らそつと寝かしつけておいて、行者を呼んで御祈祷して貰つたら、一週間ぐらいですつかり正気に復かえりました。尤もその前もつとから少しずつ意識が戻つて来て、己はこんな目に遇つたとか、何処そこへ連れて行かれたとか、欺あざわされていた間のことをぼつぼつしやべり出しましたがね。ええ、そうなんです、今申し上げた話と云うのは、その時私がその本人から聞いたんですよ。後で念のためにお堂のところへ行つてみましたが、成る程屋根に大穴が開いているし、中には小便が垂れ流してあつて、臭いと云つたらありませんでした。当人も、「そうそう、己はあの棕櫚山を上る時に怪我をした筈だが」と云つて、脚を出して見ると、たしかに皮が擦り剥けている。フンドシの解けたのなんぞも、よつぽどたつてからイ

カキ山へ芝刈りに行った女が、木の枝に引つかかっているのを見つけて、ひどく恐がって逃げて来たことがありました。その外何処でこういうことがあつたと云う所を調べてみると、大体その地点に證拠が残っていたんですから、それを考えても出鱈目じゃないんですな。縄の帯をしていたのも、歩いているうちに帯が解けたんで、無意識ながら縄を拾って締めたんでしような。そのうちその男は一年ぐらい多少ぼんやりしていましたが、今でも酔っ払った時なんか、「狐つきの話をしろ」と云うと、笑いながら話し出すんです。

青空文庫情報

底本：「聞書抄」中公文庫、中央公論新社

1984（昭和59）年7月10日初版発行

2005（平成17）年9月25日改版発行

底本の親本：「谷崎潤一郎全集 第十三巻」中央公論社

1982（昭和57）年5月25日

初出：「改造」

1931（昭和6）年9月号

※表題は底本では、「紀伊【#（ノ）】国【#（ノ）】狐憑【#（ク）】」【#二】漆搔【#（キハ）】」【#一】語」となっています

す。

※底本は新字新仮名づかいです。なお旧字の混在は、底本通りです。

入力：kompass

校正：酒井裕二

2016年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

紀伊国狐憑漆搔語

谷崎潤一郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>